りびんぐらいぶず　平成29（2017）年12月第1号

目覚める宗教が求められている

◆黄金のチェイン

私は、阿弥陀佛の世界中に広がる慈悲を象徴する愛の「黄金のチェイン」の中の、一つのリンク（結び目）です。そのチェインの一つのリンクとして明るく強く生き続けます。

生きとし生けるものに優しく接し、そして私より弱きものを守ります。

清く美しく考え、清く美しく話し、そして私より弱きものを守ります。

清く美しく考え、清く美しく話し、清く美しく行動することに努めます。

それは、私の今の行いが、自分の幸福や不幸だけではなく、他の幸福や不幸も左右することを知っているからです。

阿弥陀佛の慈悲という愛の「黄金のチェイン」のリンクの一つひとつが明るく強くなり、そして私たちすべてが絶対なる安らぎをえられますように

（Ref北米仏教教団『黄金のチェイン』）

◆はじめに

龍大真宗学会第七十一回大会基調講演はケネス･田中武蔵野大学教授による**「欧米における浄土真宗のイメージへの反論」**だった。

あるときケネス･田中氏が自己紹介されると、So, you are the Christian Buddhist!「ああ、貴方がキリスト教仏教徒さんですね」と応対され困惑されたことがこれを端的に物語る。

その背景には、第一に、浄土真宗の要素概念がキリスト教と類似することが挙がる。

本質的には全く異なるものの、「阿弥陀仏と God」、「浄土と Heaven」、「信心と Faith」等の形式的類似性である。

･第二に、「阿弥陀佛の恩寵(Grace)によってのみ衆生の救済が成り立つ」という救いの構造は、仏教の本流から外れているのではないかという指摘にある。浄土教の体系理解のない、お釈迦様の仏教とは全く別物という理解は、実は日本人にもある（Ref 佐々木閑『ブッダ真理の言葉』NHK 出版 P11-2）。

◆これに対する反論の方法をケネス･田中氏は次のように指摘される。

◆形成されたイメージ払拭の方途

第一に、親鸞聖人のみ教えは、根本的には「目覚めの宗教」であって、「（私が(主語になって)）信ずる宗教」ではないことである。

(考察)ここで「目ざめる」というと、聖道門のさとりとの区別が付かないから、正確には阿弥陀如来から本願力回向される「本願招喚の勅命」によって喚び覚まされることを意味する to be awaken になる。

喚び続けていて下さる阿弥陀如来のお喚び声に喚び覚まされると言う意味である。

続いて先生は、親鸞聖人の「信心」は、「**仏法の大海は信をもって能入とし、智をもって能度とする**（Ref『大智度論』）」の「信」ではなく「智」に値するとご指摘であった。

第二に、浄土真宗の信心体得者の「信心」には「委託、歓喜、無疑、智慧」の四側面があるが、「智慧」に焦点を当てるべきであり、

智慧の念仏得ることは
法蔵願力のなせるなり
信心の智慧なかりせば
いかでか涅槃をさとらまし

(Ref 正像末和讃第三十五番、註釈版聖典 p606)

の「信心の智慧」について「**弥陀のちかひはちゑにてましますゆへに、信ずるこころの出でくるは、智慧のおこるとしるべし**」と異本御左訓にあることから、親鸞聖人ご自身が目覚めの自覚を体験なさったと窺われる。

そうすると浄土真宗の信心は、智慧の側面が濃厚であるのだから、キリスト教との類似性を払拭できない Entrusting mind（委ねる心、委託）を訳語に充てるだけでは足りない。
寧ろ、智慧の意味を含む realization(気付き)、 awareness(自覚、意識)、または awakening (目ざめ)（これは、to be awaken というべきか）を積極的に示すのが妥当ということになる。

◆北米での宗教形態（パラダイム）の変容変貌

ところで、北米での宗教パラダイムは「目覚める宗教」の傾向が高まっている(Ref ケネス･タナカ著『アメリカ仏教ー仏教も変わる、アメリカも変わる』(武蔵野大学出版会、2010)。

北米の浄土真宗では、「信じる宗教」では、なく、「目覚める宗教」の傾向が目立つことが次のアンケート結果からも知られるからである。
Q.「貴方にとって阿弥陀仏とはどういう意味を持つか？」に対する回答は門徒･開教使共に「智慧と慈悲の象徴」が最も多く、「日常生活に働くいのちの人格化」がこれに次いでいた。
Q.「貴方にとって浄土とはどういう意味を持ちますか？」に対する回答は、門徒･開教使共に「場所ではなく仏に成る涅槃に等しい状態」が最も多く、「こころが清浄された状態の表現」がこれに次いでいた。

◆現代日本人が求める宗教性

現代日本に視点を移してみると、
第一に、特に若い世代が求めるものには、①瞑想（メディテーション）、②日常問題(仕事上の問題、人間関係等)に対応（カウンセリング）する新興宗教が挙げられ、
第二に、現代社会の五つ特徴とそれらが仏教に求めるものがあるとされた。
･①平等化→女性や在家者の能力や専門性をもっと活かすべき。
･②理性化→高い教育水準→「信じる宗教」より「目覚める宗教」的な理解がより求められ、こ

れには身体的に対応した実践が好まれる。
・③多様化（宗教、人種・民族）への対応として「宗派的」・「排他的」態度は好まれない。
・④世俗化（科学万能主義、政教分離）はあるものの、葬式という死者儀礼に関しては、仏教側の真摯で誠実な対応が必要である。
・⑤個人化（共同体依存度の低下）→若い世代のお寺離れ・宗教組織離れの傾向の強まりに対しては、「新しい繋がりの形態」を開拓することが必要である、等々である。

◆ケネス・田中先生のまとめ

第一に、欧米での浄土真宗のイメージは正確ではないので、その是正が急務であること。
第二に、親鸞聖人のみ教えが根本的に「目覚める（to be awaken）宗教である」点を強調することで、宗教パラダイムが変容しつつある現代人により魅力的となる。但し、本願力回向が本質である限り委ねる（Entrusting）という信心の側面が否定されるわけではない。
第三に、親鸞聖人のみ教えは、「この世」のみを説く他宗派の教義とは異なり、「この世」と「来世」の両方の課題に対応できる総合的なトータル・パッケージのみ教えである。
第四に、親鸞聖人のみ教えが「目覚める宗教」として現代人に有意義であり続けるためには、聖人の示された「伝統」と「己証」の両視点をバランスよく、教学的営みと教育の工夫を怠らないことが必須であるとお纏め戴いた。
(後書き)本号は、北米の現状に明るいケネス・田中先生の基調講演の中味をご紹介するために、殆どの頁をこれに割くだけで終ってしまった。
　僅かに付記したのは、「目覚める宗教」の解説である。「目覚める」とは実は本願力回向される如来が喚び続けていて下さるお喚び声に喚び覚まされることであるという「仏説無量寿経勉強会」での確認成果を反映させたことである。その趣旨を繰り返せば、ケネス・田中先生が awakeningと御案内された文言を to be awaken と改めたのである。
二、黄金のチェインは、触れ得なかったが、ケネス・田中先生から別の機会に紹介された北米教団の各教会で毎回称えられる御文である。私はこれを“ポジティブメディテーション”と称している。合掌。

◆正覚寺仏壮お聴聞の会十二月三日（日）二十時～
◆正覚寺仏婦例会　十二月十六日(土) 十九時半～
◆正覚寺除夜会十二月三十一日(日)二十三時半～
著作編集兼発行元(本願寺派 正覚寺内) 〒520-0501 大津市北小松四五二番地
TEL077-596-0166、FAX077-596-0196 住職 堅田 玄宥